

# 令和元年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

## 高校生の部 最優秀賞

聞こえてくる小説

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年 井口 陽南子

### 作品名『琴のそら音』

選んだ一行 露子の銀の様な笑い声と、婆さんの真鍮の様な笑い声と、余の銅の様な笑い声が調和して天下の春を七円五十銭の借家に集めた程陽気である。

張りつめた空気が一気に緩んだ後の幸せな情景を描いたこの一文は、心地よい金属の音のハーモニーが本の中から響いてくるようで、そこに主人公である「余」と婚約者の大事に思い合う気持ちや若い二人を見守る婆やのどっしりとした安定感も感じられ、特に好きな一文である。

音には、不安を掻き立てる音、心が安らぐ音など人の様々な感情を呼び起こす力があると思う。幼い頃の映画館で、迫力のある水の流れの激しい音に自分も流されるような恐怖を感じて泣いたことを今でも鮮明に覚えている。また様々な音が重なることにより、ある情景を思い浮かべることができる。例えば、蝉の声や風鈴の音に高校野球の応援マーチが流れるテレビの音の重なりを聞けば、のんびり過ごす夏休みの午後をイメージする人が多いのではないだろうか。

本来、音は耳で聞くものであるが、この小説では「余」の感じ取った音の説明がとても丁寧に豊かに描かれ、実際に耳から聞くよりも想像がはるかに膨らみ、まるで本から音が聞こえてくるかのように感じた。

「余」の不安は、友人の津田君の親戚がインフルエンザで息を引き取ったのと同時刻に戦地にいる夫の鏡に現れたという話を聞かされたことに始まる。さらに、婚約者のインフルエンザにはくれぐれも注意するように言われ、急に病状が心配になる。津田君の家からの帰り道、いつも聞いている鐘の音を妙な響きに感じる。何となく気がかりなことがある時に耳にする音は普段と違い不安を増幅させることがある。「あの音はいやに伸びたり縮んだりするなと考えながら歩行くと、自分の鼓動も鐘の波のうねりと共に伸びたり縮んだりする様に感ぜられる。」「余」がこの鐘の響きに自らの呼吸を合わせてしまいそうになる場面で、私も一緒に呼吸を合わせて不安な世界に引きずりこまれてしまった。そうなるのもう全てが不吉に感じられていく。雨が闇の底から蕭々と降る中、乳飲み子の棺桶とすれ違い、「余」は死を連想する。死を意識した「余」は提灯の赤い火が消えたのを見て婚約者の死を想起し、家に帰れば婆やが不吉な予言をし、追いつけかけをかけるように犬の遠吠えが聞こえてくる。犬の遠吠えは「軒をめぐる雨の響きに和して、いづくよりもなく何物か地を這うて唸り廻る様な声」で「陽気な声を無理に圧迫して陰鬱にした」声だという。「余」は朝まで不安で眠れずに過ごす。

翌朝、婚約者の家に駆けつけ無事を確認し、様子が変であったことを逆に心配されて、冒頭の笑い声の場面に繋がる。真つ暗な夜の夜の不吉な予感に苛まれる主人公と共に緊張が頂点に達したところから、何事もなかった幸せにほっとする場面まで、息を詰めて一気に読み切った。音が聞こえて気配まで感じられるような臨場感に、まるで短い映画を見たような気がした。